

夜中十二時半頃、二時頃と六時頃と三回下痢をした。お腹の上に手が上げられぬ程痛んだ、後堂に一人が休んでいるけれども、それは宮殿の中であり、諸仏如来に護られ介抱されているのだから直に、こんな苦しい時にはお念仏も出やしない、又称えねばとも、称えようとも思わない、死と言うことも考えない、墮ちりやもともと、上りや不思議、親に計らわれて何処へなりとも御勝手に。こんな楽な信仰が外に有り得ようか。

六時半の勤行には出なかつたが、御文章の終る頃にふらふらと出た。話せるだろうかと考えられつつ正信偈の講義を始め、二十分位経つ間に病気を忘れ 苦痛を忘れ 自他を忘れて大声で話していた。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。六字に動かされて嬉しさ、何ともないが話さずにはいられない、底の知れない、凡慮の及ばない或物が動く。

164

二十六日

嗚呼、縄手さん、田部さん、竹本さん、石津さん、石垣さん達は何故名号の不思議力を聞き開いて下さらないのだろうか、いやいやまだまだ私の話し方が真剣でないからだ、私に熱心が足りないからだ。……今は満足しておられるけれども……山中さん、丹治さん、平島さん、枇杷田さんも未だ薄曇りが残っているらしい。後生を気に掛けれられない人なら 私も氣にも掛からないけれども、苦悩の有る人を見れば私の苦悩である、この苦悩は次から次にと連続するのである、我が身に引受けて 無限の大慈悲が十劫已来尽未来際まで 一切衆生が総て度脱する迄、衆生苦悩我苦悩を連続し給う熱く御胸を抱いて、大音宣布遊ばす一滴を感佩せずにはいられない。如来の生血一滴に願行悉く法龍の物となり、生命となり血となり肉となり、転悪成善と生かされた今、真剣に成らずにいられようか、進まずにいられようか、有縁の同行が残らず願海に帰する迄叫び届けずには置かない。南無阿弥陀仏。

暗の部屋に一条の光線がさし込んだ時、塵の飛んでいる姿がよく見える。曠劫已来流転を続けた無明の暗室を尽十方

無碍光如来の念力が貫いた時、毒蛇悪龍の姿がよく見える、怒涛に投げられた小石は波紋を画かないが、静かな池では輪を画く様に、その儘ごかしにしていたすなおらしい感情に執われた静かな信仰に 不実一杯が真実一杯と投込んだ爆弾は 老いも若きも驚異の眼を見張った。てなかつた逆謗の魂を体験して 次から次にと煩悶者は続いた。

その中で四人の女学生は休暇中に解決が付かねばとてり去らない、その真剣な態度、を求める者の忠実さ、学者も智者も学ばねばならぬ求道振りであった。

芳賀文字 (18) けども聞けども五里霧中で御飯が食べられない。 芳賀繁子 (17) 後生の解決がつく迄は登校しない

と両親の前で泣いていた。尾賀原不二子 (17) 毎晩蚊に食われつつも仏前に跪いて合掌していた。高崎きくえ (17) 時を刻む一秒一秒が永劫浮かばぬ穴底へ引込まれるに何が何やら薩張り判らない。

何と言う麗しい菩薩の行を行っている菩薩ではないか。

「貴女方四人が四人、黒い魂を抱いて泣いているが 今死んだらどうするな！」 「ろしうてりません」

「も一つ力瘤を入れてお進みなさい。」 「何処へ力瘤を入れますか、動きのとれない、てれーとしてゐる心が返事する迄」、四人共に判り切らんと泣き出した。

「学校に行かねばならん皆さんの臨終は愈々近づいたが如何する積りか、地獄も鬼も腹の中じゃぞ、今迄の業火に焼かれなければならぬぞ。」

「先生 死んで地獄は構いませんが、今の苦しい心はどうしまししょうか。」

その時私の胸に 稲妻の様に或物が閃いた。 現在の其の苦衷を除いてくれるのが真実の親ではないか。 共々に墮ちてく

れるのが慈悲の母ではないか。水に溺れている子供を見た時、我を忘れて渦巻く中に飛込むのが血を分けた親ではないか、臨終の今どうにもしようがない業煩惱に泣く声をたよりに、やるせなき大悲招喚の勅命が聞こえるのではないか、ずるずる行くまんまが六字の親と一緒ではないか、私も泣いたが、後の方にいた五六人の同行も泣いたが、四人の学生は四人ながら大声を挙げて物が言えなかった。

何たる麗しい光景であろうか、是が人中の分陀利華でなくてなんであろう。昨日も帰る姿を見送って、早く正定聚の分人に成ってくればよいがと合掌し拜んでいたが、御親の威神力に動かされて大慶びして帰った。